『ジョナサン・ワイルド』について (1)

飯沼　馨

1

フィールディング (Henry Fielding) は、一七四三年四月に、三巻からなる『雑録集』(*Miscellanies*) を出版したが、その第三巻は、『ジョナサン・ワイルド』(*The Life of Mr. Jonathan Wild the Great*) という諷刺小説で占められていた。この物語は、のちにフィールディング自身によって全面的に改訂され、題名も *The History of the Life of the late Mr. Jonathan Wild the Great* とあらためられて、一七五四年に出版された。現在、われわれが主として読み、そして論じているのは、この五四年版である。[1]

この四巻からなる物語は、彼の他の三つの小説に比して、長さも短く、筋も比較的簡単で、登場人物も少なく、彼の小説中、一種変った作風を具えているが、物語は、やはり、「はじめ」と「なか」と「おわり」の三つの部分に画然と分たれている。はじめに、その構造と筋を追ってみよう。

「はじめ」の部分。主人公である大どろぼうジョナサン・ワイルドの生いたちは、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の場

合同様、伝記的物語の方法を踏襲して、その祖先についてのヒューモラスな記述ではじまる。ワイルドの祖先は、盗みにたけた多くの偉大な人物を輩出しているのであるが、主人公ワイルドは、「一六六五年に疫病がはじめて発生したその日」に生まれ、幼年時代から、すでに、「偉大な盗人」にふさわしい、さまざまな特性をあらわす。そして一七歳のとき、父につれられてロンドンに出、旅に出られる年齢に達するまで一緒にくらす。（現実の物語は、ここから始まる）。その間、ワイルドは親戚にあたるスナップ氏（Mr. Snap）――父の代から、ロンドンとミドルセックスの奉行の下に勤める役人で、その家は、債務者拘留所となっている――の所に出入りするようになる。この家には、仕立屋への負債が支払えぬかどで捕逮されたラ・リューズ伯爵(Count la Ruse) が監禁されている。伯爵は、賭博とインチキ・トランプの名手であるが、ワイルドは彼と近づきになり、勝負でしこたま儲けた伯爵のポケットから財布をしばしば失敬するが、「大天才は、フリーメイスン会員と同じように、容易に仲間を発見しあうものである」から、ワイルドの盗みがバレても、二人のあいだには親交が結ばれる。ワイルドは胸に一物あってのことであろう、女中に雄弁と賄賂を用いて、伯爵をこの家から逃がしてやる。ワイルドは、伯爵によって上流社会に紹介され、今や相当名の通った金満家として世間に知られるようになっていたが、父のすすめで、アメリカの英領植民地に旅行し、七年間滞在したのち帰国する。旅から戻ったばかりのワイルドは、賭博場で大儲けした伯爵の帰路を、知人の青年紳士ボブ・バグショット（Bob Bagshot）に襲わせ、儲けを奪わせる。一方、伯爵は、泣きツラに蜂で、スナップ氏たちに見っけられ、その家につれ戻されて、ふたたび監禁される。ワイルドは居酒屋でバグショットと掠奪品を山分けするが、彼はバグショットをおどしつけて、その3/4を自分のものにする。

スナップ氏には二人の美しい娘、ドッシイことシオドウシア（Miss Dosby, or Theodosia）と、ティシイことリティシア（Miss Tishy, or Lætitia）がいるが、シオドウシアの方は伯爵と密通しており、リティシアの方は、スナップ氏が将来ワイルドの妻に、と考えていた。リティシアに気のあるワイルドは、伯爵を襲った翌日、贈物を持って、この愛人を訪ね、彼女をわが物にしようと力づくでせまるが、顔を引っかかれて撃退される。「純潔なる」「美しき勝利者」リティシアは、ワイルドが退散すると、押入れに隠れていた伊達者トム・スマーク（Tom Smirk）を呼び出し、みだらな行為にふ

ける。

ワイルドは、そのあと、自分がバグショットに襲わせた伯爵――今は再びスナップ氏の家に監禁されている――を、なにくわぬ顔で訪ね、その災難話をきき、同情の素振りを示す。そこへ、スナップ氏たちがバグショットを捕えてつれて来る。バグショットは下宿代を払わずに逐電したかどで、こうして逮捕され、伯爵と同じ部屋に閉じこめられることになったのである。バグショットに恋の焔を燃やすリティシアは彼を呼び出す。その間に、伯爵はワイルドに、自分を襲ったのは、あの男らしい、とつげる。ハッとしたワイルドは、得意の弁舌をふるって無一文の男を訴える愚を説き、自分にまかせてくれ、とたのむ。そのあと、ワイルドは賭博場に行き、手先になりそうな男を物色し、二人して、大儲けしたらしい、ある紳士の帰路を襲うが、この男は二シリングしか持っていなかった（第一巻）。

この「はじめ」の部分は、主としてスナップ家を舞台にし、ワイルドをはじめ、伯爵、リティシア、バグショットなど、「偉大な」世界に住む諸人物の諸葛藤を描き、ワイルドが徐々にその「偉大さ」の特性を発揮しつつ、栄光への道を次第に切り開いて行くさまを、ヒューマーにあふれる記述によって如実に語っている、物語の発端をなす部分であるが、第二巻から始まる「なか」の部分は、トマス・ハートフリー（Mr. Thomas Heartfree）という、善良な―ワイルドの目からみれば、「愚かな」―宝石商とその一家を物語中に導入し、ワイルドとこの一家との葛藤を中心に、両者の住む世界を対照的に描き出し、ワイルドと、彼をとりまく世界の「偉大さ」がドラマティックに展開されている部分である。

「なか」の部分。ワイルドは例によって、さきに襲った紳士から奪った二シリングの3/4に当る十八ペンスを自分のポケットに収めるのであるが、浮かぬ顔で帰ろうとするとき、かって学校友達であった宝石商のハートフリーと偶然出会う。

この男は、善良で、友情に厚く、寛大で、偉大な人間の餌食になるために生れて来たような人物であり、美しい妻と、まだ幼い二人の娘を持ち、この家庭的な妻を熱愛し、家庭的だんらんを愛しているお人好しである。ハートフリーは、ワイルドとの再会を喜び、学校時代から恩義を感じていたワイルドを朝食にさそい、家にともなって帰って、妻に紹介する。ワイルドは、たちまち一策を案じ、ハートフリーに、近く結婚することになっている紳士を彼の顧客に推薦しようと約束して、相手を喜ばせ、伯爵を訪ねて、その計画を打ちあける。まず手始めとして、ワイルドは伯爵を保釈させる方法を講じる。そのために、バグショットに、伯爵はお前が犯人なのを知っている、しかし、俺が金を返させるからと云って、訴えぬよう納得させた、と告げ、彼をおどして二十一ギニー出させ、自分の父（ワイルドの父は以前相当の商人だったが、浪費と賭博に身をもちくずして、今は、スナップ氏と同じ名誉ある職についている）たちに、その一部を贈り、伯爵の保釈を実現させる。そして自由の身になった伯爵を立派な邸に住まわせ、ハートフリーをだます手筈をととのえる。そして、ハートフリーには、伯爵の所に、一番高価で一番美しい宝石を一揃持参するように伝え、一方では、伯爵に入智恵し、はじめの日には、三百ポンドばかりのダイヤモンドを一つだけとり、三千ポンドの宝石類を来週持参するようにと命じさせる。そして、その間に、ワイルドは、大胆不敵な連中をかり集める。伯爵は、云われた通り最初受取った宝石を金に換え、これを元手に賭博で一千ポンドにふやし、この金と、二千八百ポンドの小切手を、ハートフリーに渡す。この計画の立案者であるワイルドは、ハートフリーの持参した宝石類の入っている箱を伯爵から受取り、明朝二人で山分けする約束をし、一方、手先二人にハートフリーの帰路を襲わせ、彼が伯爵から受取った一千ポンドを強奪させる。そして、例によって説得よりは罵言と威嚇によって、その9/10を取る。

この偉業を果したワイルドは、リティシアを訪ねるが、途中、なじみのモリー・ストラドル嬢（Miss Molly Straddle）に出会い、二人で酒場に行き、彼女の申出に応じ贈物を進呈して、自分の情欲を充し、そのあと、こっそり、勘定も払わず逃げてしまう――一方、モリー嬢もワイルドの愛撫中、彼の財布をくすねるのにぬかりはなかった。

リティシアは二階でバグショットと睦言を交わしていたが、ワイルドの訪ねて来たのをきき、なにくわぬ顔をして下り

てくる。その間に、ワイルドは財布を失敬されているのに気ずくが、偉大な人間のこととて、口惜しさをたくみに隠し、微笑をうかべてリティシアをむかえ、宝石箱を餌に彼女を口説く。ところが、多少宝石に知識を持っているリティシアは、中の宝石類が模造品なのを発見して、ワイルドを罵倒する——伯爵も、さるもの、ワイルドに渡した箱の中には、ニセ物を入れておいたのである。ワイルドは激怒して、まっしぐらに伯爵の住いに駈けつけるが、伯爵はすでにドーヴァ（Dover）に向って遂電している。リティシアの方も、自分がワイルドと会っている間に、バグショットが監禁中のスナップ家から逃亡しているのに気づく。

ワイルドは身の不幸をなげくが、翌朝、そしらぬ顔で悠然とハートフリーを訪ね、金を奪われたばかりか怪我をして寝込んでいるハートフリーを見ると、いかにも驚いた顔付で、悲しみと、追剝への怒りを示す。そこへ徒弟が、店で宝石を見ている婦人が、これをくずしてほしいと云っている、と云って一枚の五百ポンド紙幣を持ってくる。その番号を見て、ハートフリーは、それが自分の強奪された紙幣の一枚であるのに気づく。ワイルドは、その婦人がストラドル嬢であると感づき、自分がハートフリー襲撃の張本人であるのが、彼女の口からバレるのをおそれ、自分がしらべてみようと、彼女を一室に入れさす。そして彼女をおどし、この紙幣はトマス・フィアス（Thomas Fierce）という男から貰ったものだ、と治安判事の前で偽証さす。フィアスは、ハートフリーを襲わせた時の手下の一人で、獲物の分配の時、ワイルドの提案になかなか服従しなかった男なのである。ワイルドは、この男を消してしまおうと決心したのだが、彼女の証言だけでは不充分と考え、ハートフリーを襲った、もう一人の手先、ジェイムズ・スライ（James Sly）に、お前をフィアスが訴えようとしている、とほのめかし、この男に先手を打たせて、フィアスに不利な証言をさせ、フィアスを死刑にさせてしまう。ワイルドは今や多数の徒党を集めていたが、彼は、このようにして、自分の犯行の発覚をふせぐと同時に、自分に服従しない連中を巧妙に死刑台に送るのである。

一方、ハートフリーの方は、伯爵に渡した宝石類は、自分の所にそんな高価な物がなかったため他の商人から借り受けてきた物であるうえに、やっと強奪をまぬがれた小切手が、伯爵の逃亡のため不渡となり、誰も救けてくれる者とてなく、

スナップ氏の家に身柄を拘束される。ワイルドは、子供と共に悲しみに沈んでいるハートフリー夫人に、破産令が発動されぬうちに、最も高価な宝石類を携えて、オランダに逃げよ、自分が附添って行って、あなたを無事に送りとどけたら、御主人を救いに引帰す、この計画に御主人も賛成している、と言葉たくみに夫人をだまし、彼女を夫にも会わせず、子供を召使に託させて、ハリッジ（Harwich）に同行する。そしてハリッジからロッテルダム（Rotterdam）行きの船に乗る。やがて、暴風雨に会うが、最初から夫人に食指を動かしていたワイルドは、嵐の中で、恐怖におののく彼女を犯そうとする。彼女は、船長に救われ事なきをえるが、このあと船は、フランス私掠船に襲われ降伏する。フランス私掠船の船長は、ハートフリー夫人の荷物をはじめ、すべてのものを没収し、船の全員を私掠船に移し、このイギリス船を撃沈してしまう。私掠船の船長は、ハートリー夫人に思いを寄せるが、ワイルドが彼女に暴行を加えようとした話をきいて憤激し、ワイルドをボートに乗せ、海においやる。ワイルドは漂流するうち、フランス船に救われ、イギリス海岸近くで、イギリスの漁船に移らせて貰い、ディール（Deal）に着き、そこからロンドンに戻る（第二巻）。

一方、ハートフリーの方は徒弟から、この話をきき、顔色を失い、彼女が自分をすてて逃げたのだと思い、苦悩する。だが、彼は、すべてを神の御心にまかせようと思い直し、やがて、スナップ氏の家からニューゲイト（Newgate）監獄に連行される。

ワイルドの方は、ロンドンに向う駅馬車のなかで、ある紳士に目をつけ、ロンドンに着くや、徒党の一人、メアリボーン（Marybone）に、その男を殺して金を奪え、と命じるが、メアリボーンが、どうしても殺すことを承知しないので、ワイルドは、このメアリボーンを告訴して処刑させてしまう。そして、この仕事を、「第二流の偉大な人間」にふさわしい、あらゆる資格を持つ乱暴者のファイアブラッド（Fireblood）にゆだねる。

そして、ハートフリーがニューゲイト監獄に移されたのをきいたワイルドは、彼に返報されまいかという恐怖から、この男を滅亡させようと決意し、監獄にハートフリーを訪ねて、夫人を犯そうとしたことだけは隠し、他の一切を、善意からやったことだと告白する。ハートフリーは、この率直さと落ちつき払った態度に眩惑され、彼への疑惑の念をぐらつか

せる。これを見て、ワイルドは、言葉たくみに、脱走をすすめるが、ハートフリーは、自分は自由や生命よりも、善良な良心を失いたくない、と拒絶する。

ファイアブラッドは、ワイルドの命に従い、例の紳士の乗っている筈の馬車を襲うが、当の紳士はいない。ファイアブラッドは、乗客の一人を負傷させたうえ、他の乗客から金品を強奪し、その大部分を猫ババするが、これがバレる。しかし、この男は前途有望な若者なので、ワイルドは、信義心がなければ、どろぼう稼業も終りだ、と訓戒するだけで許してやる。

ワイルドは今や徒党を組織化し、仲間から恐れられ服従されるに至った。そして、盗まれた人たちが金さえ払えば盗品を取り戻せる事務所さえ設け、将来、産をなすことを約束されているように見えたので、スナップ氏は、ワイルドの父と相談して、リティシアとワイルドを結婚させる。リティシアは、この時、すでにファイアブラッドと出来ており、リティシアとワイルドは式をあげて二週間目には猛烈な喧嘩を、おっぱじめる始末で、お互に今後は同居していても夫婦として生活しない約束をする。そして、二人は互に憎み合い一日といえども平穏な日はない。

この間、ハートフリーは、破産者たちを収容するフリート監獄（the Fleet）の特許区域に住むことを許され、すでに破産の宣告を受けている。彼は、ワイルドが妻を誘拐し、彼女の宝石類を強奪し、そして殺してしまったのではないか、という疑いをいだき始め、主人思いの徒弟ジャック・フレンドリ（Jack Friendly）と相談し、ワイルドを探していた。これを知らぬワイルドは、一策を案じ、今度はハートフリーに盗みをすすめ、その結果、絞首刑に処せられるようにしてやろう、と考えて、彼を訪ね、ハートフリーをそそのかす。しかし、前の脱獄のすすめで、ワイルドに疑惑を抱いている彼からは冷たい拒否を受けるばかりか、警官をつれてやって来たフレンドリたちに捕えられ、治安判事の前につれて行かれる。しかし、ずる賢いワイルドは、ボートにもう一人の男が乗っていた、と申し立て、ファイアブラッドに偽証させて、無罪放免となったうえに、ハートフリーは恩人を裏切った、と皆からつまはじきされるにいたる。

ワイルドは、このため、ますますハートフリーを憎み、ハートフリーは債権者をだますため、妻に宝石類を持たせ、故

意に外国へ逃がした、と訴えて出る決心をし、最も苛酷な債権者の一人を使い、ファイアブラッドに偽証させて、告訴する。そのため、ハートフリーは逮捕され、ニューゲイト監獄に収容される。フレンドリは、子供たちの世話を引受け、重罪人と同じ部屋に入れられようとするハートフリーのために、自腹を切って看守に金をつかませて、特別の部屋を確保してやり、ハートフリーを滅亡させようとする一切の策略を必ず覆すため全力をつくすと誓う。

ハートフリーの方は、神の御心にすべてを託して、自分の運命を平静に受け入れるが、ワイルドの方は、ハートフリー夫人の帰国と、ファイアブラッドの裏切りをおそれて、眠れぬ夜をすごす。そして、ファイアブラッドには、色々の約束をならべて、彼の裏切りを阻止する。この時、一味中のブルースキン（Blueskin）という男が、ワイルドに反抗し、手下たちも動揺するが、ワイルドは速座に彼を警察に密告して逮捕させ、みなぎり始めた反逆的気分を一掃するのに成功する（第三巻）。

以上が「なか」の部分であるが、ここでフィールディングは、ワイルドの「偉大さ」を最も端的に示す、ハートフリーとの葛藤を中心に据え、この一家を破滅させようとする彼の激しい願望が、着々と成就されて行くさまを描き、同時に、種々の事件を通して彼の悪魔的偉大さが、いかに底知れぬものであるかを示している。そして、ハートフリーの善良さと、ワイルドの邪悪さ、神の御心にすべてを託したハートフリーの平静さと、ワイルドの恐怖や憎悪やいらだちから生じる不安とが対照的に描かれる。また、ハートフリー夫婦間の深い愛情、徒弟フレンドリの主人に対する情愛にみちた忠誠、ハートフリーが示す子供たちへの愛着、こういう「低級」で「愚かな」人間たちの善良な世界が、ワイルドを中心とする、伯爵、バグショット、ストラドル嬢、リティシア、トマス・フィアス、ジェイムズ・スライ、メアリボーン、ファイアブラッド、ブルースキンたちの間の軋轢をリアルに描いた偉大な人間たちの世界と対照される。ワイルドのような「偉大な」人間でさえ持たねばならぬ様々の失

敗や弱点にもフィールディングは目を閉すことなく、偉大な人間の世界の、だまし合い、欺瞞、裏切り、虚偽、憎悪、肉欲、貪婪、奸計、利己心などをヒューモラスな筆致であばき、これをハートフリー一家の愛情にみちた世界と並置対照さすことによって、両者の世界の特質を互にくっきりと浮び上らせようとしている。ここでワイルドは偉大さの頂点に達したかに見えるのであるが、山の頂きにのぼりつめた人が次の瞬間にはこれを下らねばならぬように、その運命は、やがて、下降線をたどり始め、「おわり」の部分においては、この「偉大な」ワイルドの勝利の物語は、彼の悲しい栄光にみちた敗北の物語、逆に云えば、「愚かな」ハートフリーの勝利の物語に急転するのである。

「おわり」の部分。獄中で、ハートフリーは、その人のよさゆえに、フレンドリは、主人への愛情と忠義心ゆえに、皆の笑い草、軽蔑の的となる。そして、中央刑事裁判所で裁判が開かれ、フレンドリや、正直な老下婢の努力もむなしく、ハートフリーは、ワイルドやファイアブラッドの偽証により、有罪の決定をうけ、「ワイルドは今や彼の計画を完遂した」。しかし、彼が偉業をなしとげたその瞬間に、運命の女神は彼を見すてはじめる。ワイルドに密告されたブルースキンも同じ日に強盗の罪を宣告されるが、ワイルドが彼の近くに立っているとき、復讐にもえるブルースキンはナイフでワイルドの腹を刺す。ワイルドは一命をとりとめるが、この事件が端緒となってワイルドは疑いの目で見られるようになり、どろぼうが他人の手を用いて盗みを働く場合には極刑に処す、という法令が公布される。その後、まもなく、ワイルドが謝礼金と引替えに盗品をその持主に返してやったのがバレて、彼はニューゲイト監獄に入れられる。リティシアもスリを働いたかどで投獄され、ワイルドの部屋を訪ねるが、彼を慰めるどころか悪態をついて、二人は喧嘩をおっぱじめる。ファイアブラッドも口先では親切なことを云うが、彼が来るのは、実はリティシアに会うのが目的なのである。

ワイルドは獄中で、投獄されているどろぼうたちの首領株ロウジャー・ジョンソン（Roger Johnson）と張合い、皆を

うまく煽動して、自分が彼にとって代るのに成功し、他の者たちを搾取しはじめる。

やがてハートフリーへの死刑令状がとどくが、むしろワイルドの方が苦悩する。いよいよハートフリーの死刑執行の日が来る。彼は子供やフレンドリに別れをつげ、馬車に乗ろうとするとき、ハートフリー夫人が狂乱の態で駈けつけ、彼の腕の中で気絶する。そして、そこへ、ハートフリーの死刑延期の命令がとどく。というのは、彼を投獄したものの、ワイルドに疑惑を抱いた治安判事が、数日前、ファイアブラッドを強盗のかどで取り調べた際、この男を追求して、すべてがワイルドとファイアブラッドのでっち上げで、ハートフリーは無罪であることを知り、この手続をとったのである。夫人は、ハートフリーと、監獄を訪ねた治安判事に、ワイルドがボートに乗せられて追放されてから後、自分が帰国するまでの冒険談を話してきかせる。物語の途中、ワイルドがリティシアとファイアブラッドの濡れ場を発見して、獄中に大騒動がもち上ったりする。

ワイルドは獄中で、相変らず他のものをゆすったり、虚偽の証人を用意して裁判にそなえたりするが、その効もなく、彼は死刑の宣告を受ける。ときどき訪ねてくるリティシアも、彼を慰めるどころか、怒らせるばかりであり、ワイルドは酒を飲んでうさをはらす。死刑の日の朝、ワイルドはアヘンチンキを飲んで自殺をはかるが果さず、定刻がきて、彼は群集の歓呼と罵言をあびて刑場におもむき、祈禱をとなえている教誨師のポケットから栓抜きを失敬して、それを手にして、あの世におもむく。かくして、偉大なるジョナサン・ワイルドは、その偉大さにふさわしい、「偉大さの頂点」とも云うべき絞首刑によって、その栄光にみちた生涯をおえるのである。

一方、ハートフリーの方はどうなったか。例の善良な治安判事は、彼に赦免をえてやり、ハートリー夫人の宝石類を最後に保管することになったイギリス軍艦が帰国した際、その宝石類を取り戻してやり、また、ハートフリーの潔白を人びとに説き、彼の評判を回復してやる。おまけに夫人は、冒険旅行の途中、伯爵から、彼の持ち逃げした宝石類を取り戻すことができたうえに、アフリカの酋長から高価な宝石を贈られていたので、破産管財委員会の要求をみたしても、なお、かなりの金額が残る。これを元手に、この、純粋な愛情と友情に結ばれた夫婦は、勤勉と倹約によって巨額の富を得、フ

レンドリは、長女が十九歳になったときに、これを妻にし、ハートフリーの共同経営者となる。妹の方は、父のすすめにもかかわらず、父の世話をするのだと云って良縁にも耳かさず、こうして、ハートフリー、その妻、二人の娘、婿、孫たちは一つ家に住み、近所の人びとから「愛の一家」と呼ばれる。

他の登場人物のうち、スナップの娘のシオドウシアは、伯爵との不義の子を生み、アメリカに送られるが、そこで結婚して改心し、よき妻となり、伯爵は、フランスで強盗を働いて車裂の刑に会い、他の偉大な人物たちは、それにふさわしい偉大な最後をとげる（第四巻）。

これが、『ジョナサン・ワイルド』のあらすじであるが、この小説を論じる際に、一応ふれておかねばならない二つのことがある。一つは、この物語と実在の大盗人ジョナサン・ワイルドとの関係であり、他の一つは、政治家、特にウォルポール（Walpole）に対する諷刺の問題である。

まず始めに、これが、当時すでにイギリスで人口に膾炙（かいしゃ）されていたワイルドの正確な伝記でないことは明白である。

実在のワイルドは、一六八二年か八三年にスタフォードシア（Staffordshire）のウルヴァハムプトン（Wolverhampton）に、貧しいが勤勉な大工の子として生れ、子供の頃から悪才を発揮していたが、やがて尾錠職人のもとに弟子入りし、若くし結婚したが、一七〇〇年頃、ひとりでロンドンに出た。やがて借金を作って、四、五年、ウッド・ストリート・コムプター監獄（the Wood Street Compter）に入れられたが、出獄後、獄中で知り合ったスリのメアリ・ミリナー（Mary Milliner）と共同で、ルークナー小路（Lewkenor Lane）に売春宿を経営した。そして、彼女によってロンドンの暗黒社会に近づき、悪事を働き始めた。が、一七〇八年には、自らどろぼうを働くことをやめ、様々な犯罪人を組織して徒党を

作り、自分は首領となって、彼らに指図し、その上前をはねた。そして、一方では、事務所をもうけ、盗品買取りの仕事を始め、謝礼金を取ってその盗難品を持主に返してやる商売を営んだ。持主から盗難品買戻しの申込みがない場合には、それを変形したり、あるいは、オランダに持ちこんで売りさばいたりした。このオランダにさばく仕事は、ロウジャー・ジョンソンが受持っていたと云われる。

ワイルドは、自分におとなしく服従する者が捕えられたときには、色々の手を打って救ってやったが、反抗的な手下や敵方の連中は、容赦せずに警察に密告したり、つかまえて警察につき出し、徒党の首領であり、故買者であると同時に、一方ではどろぼう逮捕人として、警察の目をごまかしていた。

こうしてワイルドは、財を作り、上層階級の間にも知られ、有名人となり、一七一八年頃には、中央刑事裁判所（the Old Bailey）の近くに居をかまえた。この年に、報酬を取って盗品を取戻してやることは重罪に処する旨の法令が出たが、ワイルドは巧みに法網をくぐり、また、警察の方でもどろぼう逮捕人としての彼の援助に免じて、彼のことを大目に見ていた。

しかし、ワイルドは一七二四年に、牢獄破りの名人とうたわれたジャック・シェパード（Jack Sheppard）と、追剝のブルースキンことジョウゼフ・ブレイク（Joseph Blake）の逮捕に力を貸したころから、その運命は下降しはじめた。ブルースキンは、ワイルドの徒党の一味だったが、ワイルドと喧嘩別れをして、別の組織を作った。その復讐に、ワイルドは、彼を探し求めて恨をはらした。そして彼がニューゲイト監獄にブルースキンを訪ねた時、突然、ブルースキンに折たたみナイフで、ノドを切られたが、やっと一命はとりとめた。

一七二五年一月、ワイルドは仲間のロウジャー・ジョンソンが捕えられたとき、彼は仲間をひきつれて監獄を襲い、ジョンソンを脱獄させたが、このためにワイルドは逮捕され、一七二五年にニューゲイト監獄に送られた。

監獄でもワイルドは商売をつづけ、キャサリン・ステサム（Catherine Stetham）から、盗まれたレースを取り戻してやった礼金として十ギニー受取ったのが、一七一八年の法令にひっかかり、五月十五日に、裁判官ロバート・レイモンド

(Robert Raymond) の裁きを受けた。ワイルドは、七十六人の犯罪者の有罪決定に力を借したことを主張し、情状酌量を願ったが無駄に終り、死刑の宣告を受けた。

死刑がきまると、彼は恐怖心にうちのめされ、死刑の前日に、ニューゲイト監獄の教誨師トマス・パーニイ (Thomas Purney) から洗礼をうけた。死刑執行日にあたる一七二五年五月二十四日の午前二時頃、彼はアヘンチンキを飲んで自殺を計ったが果さず、数時間のち、タイバーン (Tyburn) の刑場で、ヤジ馬連中の面前で絞首された。②

これが実在のワイルドの生涯のあらましであるが、これを、すでに記した小説中のワイルドの生涯と比較してみれば、両者の相似と相違を、われわれは容易に見てとることができる。なにが事実で、なにがフィールディングの想像力の所産であるかを、ここで詳細に検討する必要はないと思うが、フィールディングは、実在のワイルドの悪才、奸智、冷酷、悪辣、死への恐怖などの特質を取り入れ、彼が徒党を組織してその首領となり、手下の上前をはね、敵対するものは容赦なく密告し、盗品返却事務所を設立して、それによって財と名声と社会的地位をえながら、やがて、投獄され、法令に引っかかって死刑の宣告を受け、恐怖におののいて自殺を計るが、これを果さず、遂に絞首刑に処せられるまでの生涯の骨子を比較的忠実に追っている。また、ロウジャー・ジョンソンやブルースキンなど実在の人物をも登場させ、ブルースキンの反抗とか、彼がナイフでワイルドを傷つけた事件なども、取り入れてはいる。しかし、ワイルドの生い立ち、女性関係、その他、幾多の架空的事件や人物の設定附加、種々の事件の情況の変更など、非常に自由な改変をおこなっており、特に、この小説を邪悪さと善良さの興味深いドラマたらしめているワイルドとハートフリーの葛藤など、全く架空的な出来事を、この小説の中心的テーマに据えている。これを見てもわかるように、フィールディングは、当時の人びとに馴染み深い大どろぼう

ジョナサン・ワイルドの性格と生涯をこの小説の骨子として利用し、これを彼の偉大な想像力のルツボの中で変形し、実在のワイルドよりも一層ワイルド的な、一人の「偉大な人間」の典型を創造し、かかる偉大な人間とその世界を心ゆくばかりあばき、嘲笑し、諷刺すると同時に、ワイルドとその仲間たちを、ハートフリーとその一家と対照的に描くことによって、社会の明暗を描出し、ハートフリーとワイルドの葛藤を、前者の最後的勝利に終わらせることによって、これを「善良さ」の勝利の物語たらしめているのである。フィールディングが大どろぼうワイルドの性格と生涯を単に利用したにすぎぬことは、彼の『雑録集』の「序文」[3]からも明白である。彼は、この書物がワイルドの実録でないことを述べ、

> 私の物語は、彼〔ワイルド〕が実際におこなったかもしれぬ、あるいは、おこなったであろう、あるいは、当然おこなうべきであった行為の物語であって、実際には、ワイルドという名の人物その人と同様、このような他のいかなる偉大な人間にも、ひとしくあてはまるかもしれない。

と記しているのであるから。

さて、次に、この小説が、ワイルドの形象と彼を中心とする偉大な人間たちの世界の描写を借りて、古い昔から十八世紀に至るまでの、「征服者」、「専制君主」と共に、腐敗した悪徳政治家とその仲間たちの世界を諷刺し皮肉っていること、また、フィールディングの記述中に、そのような連中への言及やあてこすりがしばしば見られることは事実である。フィールディングが「序文」の中で、「私は決してわが主人公の性格で、人間性一般を表わすつもりはない」、「ニューゲイトを仮面をはずした人間性にほかならぬとは考えないが」、「偉大な人間の豪壮な邸宅は、しばしば、仮面をつけたニューゲイトにほかならない」と云っているのは、彼が民衆を圧迫し搾

取する権力者、支配者の世界を、悪の世界と見なしたことを示している。

この小説を読む者は、フィールディングが、ワイルドの行為を、首相や政治家の行為に当つけたり、彼らとワイルドを同等視したり、ワイルドの口を借りて、彼らとどろぼうとが、ほとんど同じものだと主張したりしている個所に、たえずゆきあたる。すでによく知られている、そのような部分を、一、二記してみよう。

ワイルドは、自分の利益のために、「他人の手」を使う連中を、偉大な人間と考えるのであるが、その「高貴にして偉大な連中」のなかに、「征服者、専制君主、政治家、どろぼう」を入れ、どろぼうが首相と同じくらい多くの手先を持っていたら、自分はどの首相にも負けぬくらい偉いと云えるわけではないか？　と考える(i.14)。ここでフィールディングは、ワイルドの思考の形で、自分の利益のために他人を利用するものとして、政治家とどろぼうを同列に置いているのであり、どろぼうたちを組織して首領におさまるワイルドと、政治家たちのかしらである首相を同等視しているのである。

また、ワイルドはラ・リューズ伯爵と話をかわしながら、政治家とどろぼうは、しばしば、同じ天才、同じ才能を持っており、一方がタワー・ヒル(Tower Hill)の断頭台で生涯を終え、他方がタイバーンの絞首台で一生を終えるとしても、なんの本質的相違があろうか、と述べ、政治家の方がどろぼうよりも偉いとか幸福だとか結論なさるのなら賛成しかねる、と主張する(i. 5)。ここには、一方が断頭台で斧で首を切られ、他方が絞首台で索によって絞り首にされる以外に、なんの本質的差異があるのか、というあてつけがワイルドの口を借りて語られている。

首相に対する揶揄は、ワイルドが、ハートフリーを手下に襲わせ金を奪わせたあと、破産にひんしてスナップ家に拘留され思案にくれたハートフリーが、借金を払ってくれと催促したどの連中からも断りの手紙を貰って困

惑しているときに、ぬけぬけと彼を訪ねる場面でも用いられている。ワイルドは、バツの悪い、打ちひしがれた顔付ではなく、「首相が、その家の子郎党に向って、約束していた地位は、もう塞がってしまったよ、ときっぱり云うときの、あの気高く、大胆で、偉大な顔付」で彼を訪ねるのであるが、同時に、「首相が、こういう場合に、その表情に示す懸念と不安」をも示し、「この首相が、君が間に合うように頼まなかったのは、自分の利益をおろそかにするものだ、と相手を叱りつけるごとく」、ワイルドも、ハートフリーが伯爵を信用したことを責めたてるのである (ii. 8)。

これらの場合に政治家や首相は、必ずしも特定の個人でなく、一般的な意味に用いられているが、彼の揶揄、嘲笑、皮肉が、時の首相ウォルポールに向けられている個所も数多い。「フィールディングの批評家や伝記の著者の間で、キートリー (Thomas Keightley) が、『ジョナサン・ワイルド』の根底に政治的諷刺がひそんでいることを示唆した最初の人であるように思える」と云ったのは、バナージ (H. K. Banerji) であったが、[4] キートリーの論文[5]や、彼から示唆をえてこの説を敷衍したウェルズ (J. E. Wells) の論文[6]や、また、クロス、ダドン両教授の『フィールディング伝』においても、ワイルドをウォルポールに擬した点が、それぞれ指摘された。[7]

私が「『ジョナサン・ワイルド』の周辺」(2) (『英文学評論』第X集) で跡ずけたように、当時、フィールディングはウォルポールと敵対し、反対派と手を握っていたから、彼が反対派の連中がよくおこなった、ワイルドをウォルポールに擬する方法を踏襲し、この小説でウォルポールを皮肉っていることはあきらかであり、この小説は、彼のウォルポール敵視の総決算という面も持っている。

種々の説のなかから、フィールディングがウォルポールを諷している主な個所をここに記してみよう。

(一) ウォルポールは反対派から the Great Man と皮肉られていたことを思えば、フィールディングが主人公ワ

イルドのことを、しばしば、そのように呼んでいるのは、ウォルポールへのあてつけであるのは容易に推測できる。また、ワイルドの特性――利己主義、強欲、専横、冷酷、裏切り、贈賄などは、反対派の書きものの中で、たえずウォルポールに帰せられていた特性であったといわれる。

㈡この小説の最初のワイルドの祖先の記述は、William Musgrave, *A Brief and True History of Robert Walpole and his Family* (1738) における、ウォルポールにおもねた、長たらしいウォルポールの祖先の記述のパーレスクであると云われ、そこで、ワイルドの父が主人公ワイルドと同名のジョナサンとされ、さらに、主人公ワイルドの祖父の名を、はじめにジェイムズ (James) と記しておきながら、作者の思いちがいであるかのように、次の個所ではエドワード (Edward) としてある――これは五四年版でも訂正されていない――のは (i. 2)、ウォルポールの父が、ウォルポールと同名のロバートであったことと、祖父がエドワードであったのに当てつけたものと考えられる。

㈢ワイルドが淫奔なリティシアと結婚後二週間もたたぬうちに喧嘩をはじめ、同居はするものの互に勝手な生活をしようととりきめるが (iii. 8)、この二人の不仲は、ウォルポールと、当時、様々のいかがわしい噂のあった彼の妻キャサリン・ショーター (Catherine Shorter) との不和と、このような相互契約を諷したものである。

㈣ワイルドはリティシアに会いに行く途中で、なじみのモリー・ストラドル嬢に会い、関係を結ぶが (ii. 3)、このストラドル嬢は、ウォルポールの情婦マライア・スケレット (Maria Skerrett)――キャサリン・ショーターの死後、ウォルポールの正式の妻となった――に引っかけたものである。

㈤「女郎屋の人間の方が宮廷の女衒(ぜけん)よりも、はるかに罪がない！」というワイルドの言葉 (i. 5) のなかの、宮廷の女衒というのは、ウォルポールが、女癖の悪いジョージ二世 (George II) に、ウォール モーデン夫人

(Madam Walmoden) をはじめ、その他の女性をとりもったことを指している。

(六)「政治家が立派な邸宅や絵に、儲けを使うよりも……」(i. 5) とか、「一番壮麗な邸に住み、……一番美しい彫刻や優美な絵で目をたのしませ……」(i. 8) というような、ワイルドの言葉は、一七四〇年三月十一日号の「チャムピオン」紙 (The Champion) などでフィールディングがすでに諷したように、ウォルポールがホウトン (Houghton) の立派な邸や、絵画など美術品の蒐集に、大金を費したのに対するあてこすりである。

(七)リティシアが、右の脚に美しい青いリボンを結び、左脚には、それより価値のないものとして、ペチコートの切端とおぼしき黄色のリボンを結んでいた、という記述 (i. 9) ——四三年版では、「黄色いリボン」の個所が、もっとはっきりと、「赤いリボン」となっている——は、ウォルポールが貰ったガーター勲章とバース勲章をさすと同時に、彼の勲章好きへの諷刺と考えられる。さらに、ワイルドが、ブルースキンに、自分が彼に目をかけてやり、彼の帽子に隊長のしるしとしてリボンをつけてやったことを思い出させようとするワイルドの言葉 (iii. 14) も、やはりウォルポールの勲章ずきを皮肉ったものである。

(八)ワイルドが、宗教の問題についてのべている疑惑——ボートに移されて海上を漂流する場合 (ii. 11) や、ニューゲイトの教誨師との対話 (iv. 13)——は、宗教心のうすいウォルポールの有名な懐疑主義のパロディである。

(九)死刑の判決を受けたワイルドは、「あの、苦悩せる偉大な人間を真に支えてくれるもの、つまり、酒びん」によって憂さをはらすが (iv. 12)、これは大酒家のウォルポール——飲酒の風習はこの時代の悪弊の一つだったが、アンドレ・モーロワ (Andre Maurois) は、その『英国史』の中で、「ボーリングブルックは、びん一本組、カーテレットは、びん二本組、ウォルポールは、びん三本組だった」と記している——を諷したものである。

(一〇)「偉大な人間」というものは自分の目的のために、他人の手を使い、御本人は、できるかぎり、カーテンの

かげに隠れているべきものなのだが、「その名が共に歴史に残るような二人の真に偉大な人間が、現代、舞台に現われて、チャンバラをやらかし、まことにみじめにも、見物人にお互の姿をさらしあって見物人をたのしませた」云々というフィールディングの言葉（iii. 11）は、かつて同じ党派に属して協力しあったウォルポールとタウンゼンド（Townshend）が権力争いから不和となり、一七二九年か三〇年頃に、クリーブランド・コート（Cleveland Court）のセルウィン大佐（Colonel Selwyn）の家で、二人が剣を抜いて、つかみ合いをやった事件の嘲笑である。

(二)第三巻第五章で、フィールディングが物語中に顔を出し、ヘボ文士どもが遠慮なしに社会に向って、ほのめかしや警告を発表するために、偉大な人びとに多くの不都合が生じ、そのため、多くの偉大な輝やかしい計画が挫折させられてきた、だから、取締りのうまくいっている国家では、こういう自由は、なにか健全な法律によって制限され、すべての作家が、偉大な人びとや、その手下によって、まず是認され許可されるもの以外の教示を発表することを禁止されるのが望ましい、そうすれば、偉大な人びとの最も高貴な計画を推進するのに役立つもの以外は、一切、発表されなくなるだろう、と皮肉っているのは、云うまでもなく、ウォルポールが「演劇取締法」を発令して、内閣への批判を抑えたことへの怒りと、そのような弾圧が、他の新聞などによる言論の自由にも及びはせぬかという疑惧を、皮肉とあてこすりをもって表明したものである。

(三)スウィフト（Swift）の『ガリヴァー旅行記』（*Gulliver's Travels*）第一巻第四章中の、かかとの高い靴と、かかとの低い靴をはいて互に争っているリリパット（Lilliput）の二つの政党への諷刺からヒントをえたと云われる、あの有名な「帽子について」（"Of Hats"）という章（ii. 6）――この中では、ワイルドが組織した徒党のなかに、「ふちがひどく上反りした帽子」を愛好する一派と、「ふちが目の上まで垂れ下っている帽子、つまり

角帽」を好む一派とがあり、両派が互に反目しあっているのを見て、ワイルドが、「公衆から金品を奪うというような偉大にして輝やかしい事業に乗りだした人びと」が、帽子の型の相違で互に争うのは馬鹿げている、どんな帽子をかぶろうと、どろぼうにかわりはないじゃないか、獲物の一番沢山入る帽子が一番いい帽子だと考えろ、と演説して、両派を和解させる事件が描かれている――は、ささいな主義主張の相違で対立しがちな連中の不和と争いを調停してゆくウォルポールの巧妙さの諷刺であり、特に、五四年版では、ふちのそり反った帽子をかぶっている連中は、Cavaliers, tory rory ranter boys などと呼ばれ、ふちの垂れ下った帽子をかぶっている連中は、Wags, round heads, shakebags, Oldnolls その他の名で呼ばれていた、と書き加えてある所から見て、ウォルポールがトーリー（Tory）党、ウイッグ（Whig）党の両党をたくみに調停していった巧妙な手腕の諷刺と考えられる。（この諷刺からは、同時に、ワイルドの説得の言葉から考えて、ささいな主義主張の相違で互に争っている多くの政治家の愚劣さに対するフィールディングの嘲笑、互に異なった主義主張を掲げていようと、いずれの政党も結局は、「公衆から金品を奪うというような偉大にして輝やかしい事業に乗り出した人びと」であり、できるだけ私利私欲を計ることを目的にしている政治家どもの集りにすぎぬではないか、民衆を一番搾取して一番多くの獲物をせしめる政党が一番すぐれた政党なのじゃないか、というフィールディングの当時の政治家たちへの辛辣な皮肉、などをもくみとることができよう。フィールディング自身ウイッグ党に属していたが、彼はウィッグ党内にもかかる多くの政治家を見たのであった）。

㈢「帽子について」の章とともに、まことにすぐれた諷刺の一つである、第四巻第三章の、ニューゲイト監獄におけるワイルドとロウジャー・ジョンソンの勢力争いは、やはり、ウォルポールへのあてこすりを含んでいる。尤も、この諷刺については、すこし説明を必要とする。ワイルドがニューゲイト監獄に入れられたとき、すで

にジョンソンという男が、ここに入れられているどろぼうたちの首領となり、彼らから貢物を取り立てていた。権力欲にもえるワイルドは、ニューゲイトの自由と各自の特権が彼によって侵害されていると、ジョンソン弾劾の演説をぶち、手下の一人に自分を首領に推薦させる。どろぼうたち（悪徳政治家たちをさす）は、それぞれ分け前にありつこうと両派にわかれ、おまけに両派の餌食になるにきまっている債務者たち（重税を課せられる一般国民をさす）までもが二派に分れて、互に争う。結果は、ワイルドが勝利を得て、ジョンソンの地位と権力を奪い、彼の絹の寝巻や、絹糸で刺繍のしてあるチョッキや、ビロードの帽子を剝ぎとる。それを売って皆で分けようという話が出ると、彼は、なにやかや口実をもうけ、その提案を斥ける。そして、皆の驚いたことには、二日もたたぬうちに、ワイルドは、かつて彼が「恥辱の服」と呼んだ、その寝巻や、また、かつて「おなじ不名誉のしるし」と罵った、そのチョッキやビロードの帽子を自分が身につけて、皆の前に現われ、これらはジョンソンより、自分の方に、ずっとよく似合う、とうそぶくのである。ワイルドは、こうしてジョンソンに取って代り、囚人たちから貢物をとり立て、その金を自分のために使い、ジョンソンから剝ぎとった美しい装飾品を身につけて威張って歩きまわるのである。（このすぐれた奇抜な諷刺に比肩するものとして、私は、ジョージ・オーウェル（George Orwell）の『動物農場』（*Animal Farm*）の第十章、人間に代って権力を握った豚たちが、かつて自分たちを搾取した人間と同じ姿になり、同じような生活を始める場面の滑稽でショッキングな描写を想起するのみである）。

このあとに、フィールディングはつけ加えて云っているのであるが、寝巻は、実際には暖くなかったし、それに、これはもともと彼のものでなかったことを皆が知っていたから名誉にもならず、チョッキは大きすぎ、うまくからだに合わず、帽子は重くて頭痛がした、と揶揄的に書いているのである。

この場合、クロス教授や、ダドン教授も記している通り、[8] 従来、二つの考え方が存在する。つまり、(1)ワイルドを今まで通りウォルポールと考え、ロウジャー・ジョンソンをタウンゼンドと見なし、この諷刺を、ウォルポール（＝ワイルド）と、彼と不仲になって一七三〇年に内閣を去ったタウンゼンド（＝ジョンソン）の勢力争いのパロディと見るか、(2)ワイルドを、この場合、ウイルミングトン伯爵（the Earl of Wilmington）と考え、ジョンソンをウォルポールと見なし、これを、ウイルミングトン伯爵（＝ワイルド）が、一七四二年にウォルポール（＝ジョンソン）にとって代って、首相となった事件を諷したと考えるか、である。(1)の場合には、ウォルポール（＝ワイルド）の方がタウンゼンド（＝ジョンソン）より偉大であったことは衆知の事実であったから、最後の、ジョンソンの身につけていたものが、ワイルドには大きすぎたり重すぎたりしたという皮肉は矛盾を生じる。(2)の場合には、ウォルポールは敵味方から偉大な人物と考えられており、ウイルミングトン伯爵は、指導者に必要な知性と決断力にかけた、全く、つまらぬ人物と見なされていたことから考えて、最後の記述と矛盾しない。それゆえ、この諷刺の場合にかぎり、諷刺家のよくやるように、フィールディングは、今までとちがって、ワイルドをウォルポールでなく、ウィルミングトン伯爵に擬し、ジョンソンを彼にとって代られたウォルポールとしたと考える方が自然であろう。

以上が、この小説の中で、フィールディングがまことに鮮やかにやってのけたウォルポール個人へのあてこすりのあらましであるが、ここでわれわれの注意しなければならぬことは、これらのなかで、(ニ)のワイルドの祖先の記述や、(七)のリティシアの脚に結んだリボンのような、一寸ひねったあてこすりは別として、他の諷刺の大部分は、現代の読者が、ウォルポールや当時の事情について、なんにも知らなくても、この小説への興味はすこしも減じぬばかりか、それらの諷刺を「偉大な人間」たち一般への諷刺として、充分に共感しうる、ということで

ある。このことは、ウォルポール個人への諷刺さえもが、彼個人を貫いて「偉大な人間」たちの特質を暴露する鋭い力を具えているということに他ならない。われわれの周囲を見てみたまえ。これらの諷刺は、現代においてさえも、多くの「偉大な人間」たちとその世界に、あまりにも鮮やかに当てはまるではないか。フィールディングは「序文」のなかで、「これは、ジョナサン・ワイルドその人をきわめて忠実に描いたものでないのと同じく、これはまた、だれか他の人の諸特徴を描き出そうとしたものでもない。ある悪党ではなく、悪が、私の主題である。私はだれか個人のことを特に述べようとするどころか、できるだけうまく、それを避けようとしているのだから、読者の方で、それをすこしでも誰かに当てはめようとすることは不当であろう」云々と述べている。これは、ウォルポール個人への諷刺ではないことの主張であろうが、上述のような理由から、私は、この言葉を諷刺家の一種の韜晦とは考えない。この小説を書くに当って、ウォルポールを「国民を欺す略奪者の団体の首領と常に見なしていた[9]」フィールディングが、この中でウォルポール個人を槍玉にあげていることは明らかであり、この小説を書く際に彼を重要なモデルの一人にしていたことは確かであるが、この書が、ウォルポール個人への諷刺だけを主眼点にしていなかったことは明白である。思えば、フィールディングが、この小説を、ワイルドの実録や、単なるウォルポール個人への攻撃的諷刺のパンフレットに終らさなかったことは賢明であった。もしそうしていたら、これは、今では、ただ少数の好事家に読まれるにすぎない読物となっていたであろう。フィールディングは、さらに、ウォルポールがすでにこの世を去った（一七四五年）のち、一七五四年の改訂版で、文章上の訂正ばかりでなく、ウォルポールへの政治的あてこすりの強い「格言について」（“Of Proverbs”）という章（一七四三年版第二巻第十二章）を削除したり、「首相」や「大臣」とかいう言葉を、「政治家」という一般的な言葉に訂正したりして、ウォルポール個人へのあてこすりを、さらに一層弱めた。これはきわめて適切な処置であった。こ

の小説の興味と卓抜さは、今まで跡ずけたように、大盗人ワイルドの性格や生涯をその枠組として利用し、ウォルポールへの敵視を、その発条として、ワイルドやウォルポールをつきつらぬいて、「偉大な人間」の典型と、その世界を創造し、「偉大さ」の諸相を巧妙に暴露諷刺すると同時に、ハートフリーの導入によって、「善良さ」と「偉大さ」の対立のドラマを生き生きと展開させ、十八世紀社会ばかりでなく、古くから人間社会に内在する、深刻な問題を興味深く、笑いのうちに剔出したところにあろう。

2

A・D・マッキロップ（McKillop）はその著の中で、[10]「この物語は、小説よりはむしろ諷刺として判断されるべきである」と云っている。この意味は理解できるが、この物語は、形態的には、やはり、ハートフリーとワイルドの葛藤を中心に据えた、諷刺小説であって、その基本的テーマは、「偉大さ」と「善良さ」の対立である。この二つの概念をフィールディングが常に対置させて考えて来たことは、「『ジョナサン・ワイルド』の周辺」(2)（『英文学評論』第X集）で簡単に跡ずけたが、この物語は、その小説化であると云える。ここで、フィールディングが憎しみをこめて諷刺嘲笑している「偉大さ」を、彼が、どのように概念ずけ、これに対して、どういう考えを表明しているかをさぐってみたい。

フィールディングは、まず、「序文」のなかで、「善良さ」（goodness）と「偉大さ」（greatness）の概念が混同されているのを歎き、善良な人間を構成する要素は「慈悲（benevolence）、廉恥心（honour）、正直（honesty）、慈善（charity）」であり、偉大な人間の重要な資質は「勇気」（courage）で、両者の構成要素は、全く異るものであり、偉大だが善良でない人間、善良だが偉大でない人間、というものは存在しうるものだ、とする。そして、彼

は、この世に、三つの明確な性格――「偉大なるもの」、「善良なるもの」、「偉大にして善良なるもの」が存在すると考える。このうち、「偉大にして善良なるもの」は、人間性のうちで最も崇高にして、どんなに讃美賞讃しても足りぬものであり、「完全な作品、自然の生んだ『イリアド』(*The Iliad*)とも云うべきもの」であり、われわれの心を「愛と驚嘆と喜び」でみたす。次に「善良なるもの」の場合には、「われわれの驚嘆は消え、喜びは減じるが、愛は残る」。「善良なるもの」は、決して、愚人、臆病者ではないが、偉大であるには、しばしば、才能や勇気を欠いている。最後に、「偉大なるもの」は、全く善良さを欠き、真に偉大な精神とは、「高慢(pride)、見栄(ostentation)、尊大(insolence)、残虐(cruelty)および、あらゆる種類の邪悪(villainy)」のことなのであって、フィールディングは、この「偉大さ」の正体を『ジョナサン・ワイルド』の中で、「善良さ」と対比的に暴露しようとするのである。

『ジョナサン・ワイルド』のなかでも、フィールディングは、第一巻第一章で、作家たちが「善良さ」と「偉大さ」の観念を混同さすのに全力をつくしてきた結果、人類が誤った意見を持つにいたったことを指適し、両者は全く異ったもので、

偉大さは、あらゆる種類の災害を人類にもたらし、善良さは、人類からそれらを除去するにある。

と主張している。そして、「それゆえに、同一人物が両者を二つながら持ち合わせていることは、全くありそうもないように思える」と述べ、次のように云っている。

アレグザンダー(Alexander)やシーザー(Cæsar)の伝記においては、しばしば、しかも、まことに不当にも、彼らの

慈悲や寛大、彼らの仁慈や親切を思い起させられる。前者が火と剣をもって広大な帝国を侵略し、無数の罪もない、哀れな人びとの命を奪い、旋風のように破滅と荒廃をまき散らしたときに、われわれは、彼の仁慈の一例として、彼が一老婆のノドをかき切らず、彼女の娘たちを犯さず、ただ彼女らの衣服をぬがすだけで満足した、と語られる。そして、驚嘆すべき偉大な精神を具えた大シーザーが、彼の国の自由を破壊し、あらゆる欺瞞と暴力の手段によって、仲間たちのかしらとなり、この世はじまって以来の最も偉大な国民を堕落させドレイ化させたときに、われわれは、彼の寛容の一つの証拠として、彼が、その追随者や手先ども――彼らによって彼は自分の目的を果し、その手助けによってその目的を樹立することができた――に対して気前がよかったことを思い出させられる。

と憎悪をこめて皮肉っている。

フィールディングの云う「善良な人間」とは、今まで記して来たことから推察できるように、「愚人」や「臆病者」ではないにしても、偉大な人間の持つ「才能」や「勇気」を欠くかわりに、「慈悲、廉恥心、正直、慈善」のような特質をそなえ、われわれに「愛」の気持を引きおこさせ、「人類から災害を除去する」ことを志向している人間である。

一方、偉大な人間とは、「善良さ」を一かけらも持たず、「高慢、見栄、尊大、残虐、および、あらゆる種類の邪悪」を有し、「あらゆる種類の災害を人類にもたらす」人間のことなのである。

しかし、この偉大な人間とて、小人たちの持つ弱点に全然悩まないわけではない。「偉大な人間たちも、日常生活において小人たちと同じ弱点や不便を免がれず、英雄たちも、彼ら自身や、彼らにへつらう連中が必死になって否定するにもかかわらず、実際には、他の人間と同じ種属に属しており、彼らは主として、彼らの偉大さ、すなわち、俗衆が誤って名ずけている、邪悪さの莫大さの点で異っている」にすぎないのである(第四巻第六章)。

そして、偉大な人間たちは、上流社会に属するか下流社会に属するかの差こそあれ、政治家であろうと、どろぼうであろうと、同じ天才、資質、才能を持っているのである（第一巻第五章）。要するに、「偉大さは、力、高慢、尊大、人類に災害を加えること、にある」がゆえに、「偉大な人間と偉大な悪党とは同義語」であり（第四巻第十五章）、「邪悪、別名は、偉大」（第四巻第六章）ということになる。

彼らは「全くとてつもない大災害を遂行するという目的」を持ってこの世に生れて来たのであり（第一巻第一章）、「満足と充足に対する、あの激しい嫌悪」、「このみたせばみたすほど、つのってゆく高貴な貪婪が、これら、わが偉大な人間たちの第一原理、あるいは第一構成要素」であり（第一巻第十四章）、「偉大さの最もたしかなしるしはあくことを知らぬ貪欲さである」（第二巻第二章）。この満足を知らぬ、あくなき貪婪さをもって、彼らは、人類に災害を加えつづけるのであるが、かかる彼らの苦難にみちた偉業を完遂させるものは、一体、なになのか。フィールディングは答える。「『征服者』だろうと、『暴君』であろうと、『政治家』であろうと、『どろぼう』であろうと、真に『偉大な』人間を支えるものは、ただ、内心の栄光、偉大にして驚嘆すべき仕事をなしているという、ひそかな意識である。かかる人間は、個人的な呪いや公的な呪詛にたえぬかねばならない。そして、彼は全人類によって憎まれ嫌われても、心ひそかに自分自身に満足しなければならぬ。権力や富を持ち、誇りや貪欲や贅沢が望みうる、あらゆる人間の幸福を持っている人びとをはげまして、家をすて、安楽と休息をなげうたせ、また、富と楽しみを犠牲にし、艱難辛苦をしのび、運命が惜しみなくあたえた一切のものを賭して、軍隊という多数のどろぼうたちのかしらになって、隣人を苦しめ、同胞のあいだに、凌辱、強奪、流血その他のあらゆる種類の悲惨をもたらすようにさせうるのは、かかる内心の満足のほかになにがあろうか」（第二巻第四章）。

かかる「内心の栄光」「内心の満足」に支えられて、苦難に耐え、貪婪な野心にもえて、偉大さにつきすすんで行く偉大な人びとを、フィールディングは、アルプスを越える旅人や、バース（Bath）近くの丘をこえて西に旅する人にたとえながら、次のように、皮肉たっぷりに諷している。「彼はただちに旅路の終りを望み見ないで、計画から計画へ、丘から丘へと、けなげにも決心をひるがえすことなく進みつづけ、彼が悪戦苦闘して通って行く道が、いかにきたなかろうとも、その目をはなさぬ頂上に達しようとあくまで心にきめて、遂にたどりつく――あるひどく汚たならしい宿屋に。しかし、そこには、どんな楽しいことも休息の便もないのである」（第一巻第十四章）。

彼ら偉大な人間たちは、偉業を達成するに当って、「偉大な人物にとって絶対に欠くことのできぬ、あのきわだった沈着と顔色一つ変えぬ態度」（第二巻第五章）とか、「あらゆる恐怖や憐愍の力に屈服せぬという英雄に絶対必要な二つの資格」（第二巻第十章）などをもって事をおこない、おのれの目的を果すのに、「俗衆は裏切り、しらばくれ、約束、虚言、虚偽と呼ぶが、偉大な人間たちによって、政策、あるいは、政略、あるいは、むしろ、政治的かけひき、という総括的な名で要約される偉大な技術」（第二巻第五章）を用いるのである。それだから、「ゆううつな真実を語るならば、非常になげかわしい次第だが、偉大な人間たちの友情には絶対の信頼を置くわけにはゆかぬのである」（第四巻第二章）。

そして、「ドゥルアリ・レイン（Drury Lane）劇場の舞台においては、英雄、すなわち、主役はほとんどたえず舞台のうえで、われわれの目の前に姿を現らわしていて、端役は一晩に一度以上姿をみせないのに反し、この世の舞台においては、英雄、すなわち、偉大な人間は、つねにカーテンの蔭にかくれていて、めったに、いや絶対に、自ら、姿をあらわさず、また、自分ではなにごともおこなわないのである。……偉大な人間は、他人に

自分の仕事をさせ、前に云ったように、自分の目的のために他人の手を使い、できるだけカーテンの蔭に隠れているべきなのである」（第三巻第十一章）。

こんな風にフィールディングはその鋭い洞察をもって、「偉大な人間」の特質を述べているが、第四巻第十五章で、彼は主人公ワイルドの性格と、彼の処世訓を要約している。これらは、彼が一般の「偉大な人間」に必要な資格と考えたものと見なしてよいであろう。それによれば、偉大な人間の最も強力にして優勢な熱情は、野心であり、計画を考えつくのに、きわめてたけており、その目的を達成する手段を工夫するのが巧みであり、目的を遂行するのに不繞不屈であり、いかなる企てをおこなうにも全く申し分のない狡猾さと、臆することを知らぬ大胆さを有し、卑俗な人間の持つような正直とか謙遜とか善良さなどという低級な悪徳を絶対に具えていないのである。彼の野心についで旺盛なのは肉欲で、単純素朴な連中が愛と呼ぶようなものは、それがなんであるか知らないのである。彼は握って離さぬ方ではなく、強奪することにかけて貪欲で、全部を手に入れねば承知しないのである。そして、法律は自分のために作られていると考える。彼が最も尊敬する特性は、偽善であり、つねに、しきりと正直な公言をおこない、口先では聖者におとらぬほど、美徳と善を唱え、自分の名誉にかけて誓うことをちゅうちょせず、善良さと謙遜を最も軽蔑しているのに、たえず、両者をよそおうのである。そして、ワイルドは、偉大さに達するために十五の処世訓を定めているのだが、その中には、「愛情によって人を差別せぬことを心がけ、おのれの利益のために、万人をひとしく速やかに犠牲にすること」、「敵を許さず、用心深く、徐々に復讐をすること」、「貧乏と困窮を避け、できるかぎり、権勢富貴と密接に結ぶこと」、「おのれの徒党内で、各人相互間に、たえず、嫉妬をあふること」、「なんびとにも手柄相応の報酬を与えず、つねに、その報酬はぶんにすぎたるものであるとほのめかすこと」、「人は、商人が品物を陳列するごとく、利益をえるために、自分の美徳

を云いふらすこと」などがある。

以上が、フィールディングが鋭い目で洞察し、皮肉たっぷりに述べている偉大な人間の特質の大要であるが、一方、このような偉大な人間たち――「人類の他のものが、彼らのために使われ、彼らの利益になるためにのみ生れてきたほど、自然が、すぐれたしるしをきざんでいる、これらの偉大な人間たち」（第一巻第十四章）――の餌食になる人びとが存在しなければならぬ。そして、かかる人びとは、つねに、存在してきたのだ。つぎに引用する個所は、なんと見事に、そして、大胆に、この世界の矛盾にみちた真実をえぐり出していることであろうか。

第一巻第八章で、ワイルドがバグショットに、賭博で勝った伯爵を襲わせ、その掠奪品の3/4を自分のものにしてしまう場合に、彼が、不平たらたらのバグショットに云ってきかせる言葉のなかに、次のようなくだりがある。

俺が学校に行っている時分に、ある詩を聞いたことがあるのを憶えているが、それは、なかなか、うがったことを云っているので、俺の印象に残っているんだ。空の鳥も野の獣も、おのれのために働かず、という意味のことを云っているんだがね。そりゃ、百姓は牛にかいばをやり、羊に牧場の草を食わすさ。だが、それは自分のためで、牛や羊のためじゃない。おなじように、作男も羊飼も織工も大工も兵隊も、自分のためじゃなく、他人様のために働くんだ。奴らは、わずかばかりのあてがい扶持（労賃）で満足し、奴らの労働の成果を、われわれ『偉い者』にたのしませてくれるんだ。先生が教えてくれたが、アリストテレスは、政治学の第一巻で、人類の低級な、卑しい、有用な部分は、生れながらにして彼らより優れたる者たちの意志のドレイであり、全く家畜同様、そういう人たちの所有物だって、はっきり証明しているぜ。われわれ高級な人間について、われわれは、ただ、この世の果実を、むさぼり食うためにのみ、生れてきたと云われてい

るのは尤もなことだし、低級な階級について、彼らは、われわれのために、その果実を生み出すために生れてきたと云われているのも、尤も至極なことだ。戦の勝利は、一兵卒の汗と、命がけの働きによって得られるのではないだろうか？だのに、勝利の名誉と成果は、計画を立てた将軍のものではないかね。家は、大工とレンガ職人の労働で建てられるのではないだろうか？　だが、それは建築技師が儲けるために、また、その家に住む奴が使うために、建てられるのではないかね。彼らは、レンガ一つ積み重ねることもできないんだぜ。ラシャや絹を布に織り、いろんな美しい色に染め分ける連中は、そういった最も下等で卑しい仕事をするだけで満足しなければならず、彼らの労働の儲けと享楽の甘いしるを吸うのは、ほかの者ではないかね。広く世間に目をむけて、一番壮麗な邸に住み、一番ぜいたくな御馳走に舌ずつみをうち、一番美しい彫刻や優美な絵で目をたのしませ、そして、一番すばらしい、一番豪奢な服を身にまとっているのは誰だか、よく見てみろ。そして、こういったものを、うまく引きあてるのは、こういう便利な物一切を作るのに、ほんのすこしもあずかりもせず、また、全然そんな能力もない人間ではないかどうか教えてくれ。

これはワイルドが、どろぼうの世界も、これと同じだということを説得しようとする狡猾な言葉だが、同時にこれは、フィールディングがワイルドの口を借りておこなっている、矛盾にみちた、不合理な現実社会への鋭い分析と批判である。

このように、偉大な人間ほど、自分の利益のために他の人間を働かせ、彼らの労苦の甘い汁を吸うのである。それゆえに、第一巻第十四章で、ワイルドは、ひとり、次のように推論する。彼は、まず、

人類は、まず、自分自身の手を用いる者と、他人の手を使う者という、二つの大きな区分のもとで考察されるのが正しい。前者は、卑しい、下賤な連中で、後者は、人間のうちの上品優雅な人びとだ。

と考える。しかし、「他人の手を使う者」は、「自分たちの住んでいる社会の利益のために、人手を使う連中と、社会の利益などは全く考慮せず、ただ自分のために人手を使う連中」とに、さらに区分される、と考え、次のような推論を下す。

前者（自分たちの住んでいる社会の利益のために人手を使う連中）のなかには、郷士（yeoman）、工業家（manufacturer）商人（merchant）がおり、そして、おそらく紳士（gentleman）もこれに属する。郷士は、うぶすなの地に肥料を施し、これを耕し、大地の産物を生み出すために、人手を使う、工業家は、同じく人手を使って大地の産物に手を加えて改良し、生活の必要と便に役立つ有用な商品を作り出す。商人は、自分の商品の余分のものを輸出し、外国の余剰商品と交換するために人手を使う。これによって、地味気候を異にする、あらゆる国が、全地球上の産物を楽しむことができるのだ。紳士は、同じように、人手を使うことによって、芸術や科学を向上させたり、財産の保護と、正義を広く施行するための、よい健全な法律を作って、これを実施したり、その他社会に有用な方法で、自分の国を美化する。

それでは、ワイルドにとって、「自分の利益のためにのみ人手を使う連中」とは、どういう人びとか。

この連中（自分のためにのみ人手を使う連中）は、通常、『征服者』（conquerors）、『専制君主』（absolute princes）、『政治家』（statesmen）、そして『どろぼう』（prigs = Thieves）に区分される、あの高貴にして偉大な連中である。そして、すべてこれらの人びとは、偉大さの点で互に異っているが、それは、ただ、彼らの使う人手が『より多い』か、『より少い』かにあるにすぎない。

ワイルドは、かく推論して、自分も他の偉大な人間に負けぬよう、徒党を集めて、この連中を、自分一人の利益のために役立たせよう、と決心するのである。

ワイルドの考えによれば、「最も高貴にして偉大な連中」は、おのれ自らの利益のために、できるだけ多数の人手を使う連中であって、「征服者」、「専制君主」、「政治家」、「どろぼう」がこれに当るのである。これは、もちろん、フィールディングの彼らに対する憎しみをこめた弾劾である。フィールディングが、「郷士」、「工業家」、「商人」、「紳士」を、他人の手を使うけれども、それは社会の利益のためであり、自分一個の利益のためではないと考え、「高貴にして偉大な人間」の中に入れていないのは、労資間の軋轢が、まだ激化しておらず、このような人びとを中心として社会が繁栄向上していった、資本主義上昇期に当る十八世紀的な考え方を、おのずと反映していて興味深いが、彼は、「征服者」、「専制君主」、「政治家」（もちろん、私利私欲をはかる悪徳政治家をさす）、「どろぼう」を、多数の手先を使って彼らの上前をはねつつ悪事をおこない、「あらゆる種類の災害を人類にもたらし」国民を迫害搾取する最も偉大な――つまり、最も邪悪な――連中と見なしているのである。具体的には、彼がその名をしばしば記しているアレグザンダー、ネロ、シーザー、チャールズ一世、チャールズ七世、チャールズ十二世のような征服者や専制君主、ウォルポールのような悪徳（とフィールディングは考えた）政治家たち、ワイルドのような、どろぼうの首領を、フィールディングは、かかる「高貴にして偉大な連中」と考えたのであった。

それでは、こういう連中に対して、フィールディングは、どのような思いを寄せるのであろうか。第一巻第十四章で、彼はしみじみと述べている。

私としては、私は、自分たちが誰か偉大な人間のために生れてきたのだと考える、あの卑しい種類の人間であることを自認する。そして、もし私のような無数の虫けらどもの労苦と破滅から、偉大な人間の幸福が得られるのを見ることができれば、私は、満足して、『かくも、かくも歓喜にたえず』と叫ぶだろう。しかし、一人の『偉大な人間』が、彼の気晴しのために、飢えと寒さを味わっている五万もの人間のさなかで、彼もまた、飢えに泣き寒さに凍る思いをしているのを見るとき、また、別の偉大な人間が、彼の部下たち以上に、自分の偉大さの浅ましいドレイになりはてて、そのために呻吟苦悩するのを見るとき、さらに、全世界の国民が根こそぎにされて、一人の偉大な人間の目に、彼が、かくも多くの者を根絶したからではなく、もう根絶すべき国民がないがゆえに、涙がうかぶ様を考えるとき、そのとき、本当に私は、自然がこんな『傑作』を作らないでくれたらよかったのに、『偉大な人間』なんて一人も、この世に生れてこなかったらよかったのに、と思いたくなる。

皮肉たっぷりに書かれてはいるものの、これはフィールディングの切なる願いであり、偉大な人間という自然の生んだ「傑作」に対する、「卑しい」「虫けらども」を代弁する、心からの呪詛と云わねばならない。

かかる呪詛ゆえに、フィールディングは、ワイルドの運命が下降線をたどり始め、彼が絞首刑を受けるに至ったことを述べるとき、彼の筆は、歓喜のひびきを伝えている。「あらゆる偉大な人間が完遂すべき災害と不正の一定限度というものがあるらしい。そのあとで、運命の女神は、尻から糸を出してマユをかけてしまったカイコ同様、彼を無用と見なし、彼を見すてるのである」（第四巻第一章）。フィールディングは、ワイルドが絞首刑の宣告をうけたことに対し、「私としては、正直に云って、この絞首による死は、英雄にとって最もふさわしいものと思う」と述べ（第四巻第十二章）、彼の絞首刑を、「わが英雄の偉大さの仕上げ」と見なし（第四巻第十四章）、次のように述べている。

かくて、大どろぼうジョナサン・ワイルドは、彼の一生と同じ栄光にみちた死によって倒れた。その死は、彼の一生と完全に一致するものであったから、その死がなければ、彼の一生は、悲しくも片輪なもの、不完全なものになったにちがいない。死こそ、幾人かの古今の英雄たちの性格を完全なものにするのに欠けているものであって、彼らが死を迎えていれば、彼らの伝記は、あらゆる時代の最も賢明な人びとによって、はるかに大きな喜びを以て読まれたであろう。

これらの言葉には、偉大な人間の敗北と、彼らの最後にふさわしい悲惨な死を望むフィールディグの、いや、低級な卑しい人間どもの、彼らへの憎悪がくみとられる。と同時に、彼は、偉大な人間たちが、超人間的な労苦を払って、偉大さに達しようとする、その労力のむなしさに、ある感慨なしにはいられないのである。

実際、偉大な人間たちが普通たどる運命を考える人は誰でも、彼らが世人によって彼らに与えられる賞讃に充分価するものであり、これを苦心の末、獲得するものであることを認めねばならない。というのは、われわれが、偉大さへの道に附随する労苦、苦悩、不安、危険を考えるとき、われわれは牧師と共に、『人間は地獄を買うのに必要な苦しみの半分で天国に行ける』と云ってもよいのだから（第四巻第十五章）。

では、次々と人びとが野心と権力欲にもえて、労苦、苦悩、不安、危険をも、ものともせず、偉大さへの道をたどろうと、むなしい努力を重ねてゆくとき、われわれは、一体、どうしたらいいのか。「フィールディングは根本的にモラリスト（moralist）」であり、「英国小説家のなかで最も思索的な小説家の一人」である、と云ったのは、ジョージ・シァバーン（George Sherburn）であり、[11]「モラリストとして、彼はリチャードソン（Richardson）の生真面目なスタイルよりも、笑いとばす諷刺様式を好んだ。彼が、いろいろな云い方で述べているよう

に、彼は笑顔で真実を語り、人類を笑って彼らの好きな愚行や悪徳をやめさせ、人類をくすぐって行儀正しくさせることをえらぶ」と述べたのは、バティスティン（Martin C. Battestin）であり、[12] モラリストのフィールディングと、サティリスト（諷刺家）のフィールディングは楯の両面であるが、この小説のすぐれた諷刺のなかに、ときどき、生真目なモラリストのフィールディングが、ひょいと顔をのぞかせざるをえなかった個所が、いくつかある。その一つは、すでに記した、第四巻第三章の、ワイルドとジョンソンの勢力争いの諷刺の所である。どろぼうたちばかりでなく、彼らの餌食になるにきまっている債務者たちもが二派に分れて、それぞれ、ワイルドとジョンソンを支持声援したとき、債務者のなかの「非常に勤厳で、彼らの間で権威を持っている」男が、仲間に説いてきかす。彼は、「一匹の狼が、羊の檻（おり）を一人じめしているときに、単純な羊の群が、そいつを追払って、別の狼を代りに入れても、なんのとくにもならないじゃないか」と云い、「では、取り代えるのを恐れて、われわれを今、掠奪しているどろぼうの強奪におとなしく服従するのが、われわれの義務か、と訊ねる人がいるかもしれぬ。たしかにそうではない。しかし、私は答える。掠奪者を代えるより、掠奪をなくす方がましだ、と。そして、このことをなしとげるには、われわれの習慣をすっかりかえる以外に、方法はないじゃないか」。この男は、こう述べて、次のように主張する。

すきがあり次第、互に略奪しあおうとするかわりに、共同の貰い物を正直に分けあって、われわれの勤勉からえたもので満足しようじゃないか。自分たちみんなが、共同社会の一員だと考えよう。われわれは、その社会の公益のために、自分勝手な考え方を犠牲にすべきだ。すべてのちょっとした快楽や利得のために、全体の利益を棄ててはならない。それがまた、自分たちにとっても利益を生む結果となるのだ。自由は、これ以下のどんな正直とも相入れない。そして、この自

由が満ち満ちている共同社会では、どんなどろぼうも人をドレイにしようとする図々しさも傍若無人さも持たないだろう。よし持ったとしても、その企ての結果は、ただ、自らの破滅を招くにすぎないだろう。しかし、各自が、それぞれ、自分の野心や利益や安全を追い求めるかぎり、また、各自が、それぞれ、悪事（ここで奴らの云っている『盗み』）を犯したり、悪事を弁護したりしているかぎり、自分たちの望むものを与えてくれ、恐れるものから自分らを守ってくれる権力者の寵愛と保護を自然と求めねばならない。いや、ひいては、自分たちの保護者のこの権力を増大助長させることが自分らの利益となるのだ。

これは、偉大な人間たちがのさばる現実社会に対するフィールディングの提案であり、彼の理想とする社会を実現さすための方法である。ここには、現実社会のひずみを正そうとする、社会的良心に燃える社会改良家フィールディングの厳粛な姿がある。

今まで私は、「偉大さ」についてのフィールディングのさまざまな見解を跡ずけてきた。このような考え方が、彼のこの諷刺小説の観念的基礎構造を形成しているのである。ボワロー（Boileau）、ポープ（Pope）、ヴォルテール（Voltaire）たちも、かかる征服者や専制君主を非難してきたことは、すでに「『ジョナサン・ワイルド』の周辺(2)」（『英文学評論』第X集）に記しておいたが、フィールディングは彼ら以上の激しさと広さと深い洞察をもって、かかるヒューマニズムの伝統に立ちつつ、種々の偉大な人間たちへの激しい憎悪と怒りを、ワイルドの生涯を基礎とした、この架空的な物語のなかで、静かにおさえ笑いにくるんで吐露しているのである。彼は、さまざまな「偉大な人間」たちの餌食になるために生れて来た人びと、彼らの「偉大さ」への野心と欲望によって破滅させられ苦しめられる運命にある善良な庶民、「人類の低級な、卑しい、有用な部分」の立場に立ち、彼らの憎しみと悲しみをその心として、この小説を書いている。このヒューマニズムが、この物語を支え、その中核と

なっているがゆえに、その諷刺は生きているのである。「フィールディングは有名などろぼうワイルドの形象によってウォルポールを、諷刺することによって始める。しかし彼の個人的怒りは、すぐさま、万人共通の怒り、人類の怒りに変じる」とディジャンは書いている。[13] たしかにフィールディングは、そこから始めた。しかし、ワイルドやウォルポール個人への諷刺は、彼ら個人を越える一般の「偉大な人間」への諷刺に深化し、彼のウォルポールへの個人的怒りは、かかる「偉大な人間」一般への、善良な庶民の側に立つ、人間的怒りと、鋭利な洞察と諷刺となって結実し、そして、その諷刺が真実を適確に衝き、そして深くえぐっているがゆえに、この小説はすぐれた価値を今もなお持っているのである。（未完）

［註］

① "The Worlds' Classics" の Henry Fielding, *Jonathan Wild* は、一七四三年版によっており、その Appendix には五四年版との相違が記されている。また、五四年版には、邦訳として村上至孝氏訳『快盗一代記――ジョナサン・ワイルド』（昭和二四年、世界文学社）があり、筆者も参考させて頂いた。感謝の意を表したい。

② ワイルドの生涯は、H. Dudden, *Henry Fielding*, Vol. I, Chap. XVII にも簡潔に要領よく記されているが、内多毅氏は、その著『*The Life of Mr. Jonathan Wild the Great* における諷刺の研究』（一九六一年、垂水書房）の中で、これに、C. Hibbert, *The Road to Tyburn* (1957) などを援用して、実在のワイルドの生涯を詳細に記しておられる。

③ *The Works of Henry Fielding*, ed. Leslie Stephen, Vol. VII. に集録されている。

④ H. K. Banerji, *Henry Fielding*, Chap. VI.

⑤ 一八五八年、*Fraser's Magazine* 一、二月号に掲載された "On the Life and Writings of Henry Fielding."

⑥ 一九一三年のPMLA (Vol. XXVIII, No. I, March) に掲載された "Fielding's Political Purpose in *Jonathan Wild*."

⑦ F. H. Dudden, *op. cit.*, Vol. I, Chap. XVII, (ii). W. L. Cross, *The history of Henry Fielding*, Vol. I, Chap. XIV.
また、上記、内多毅氏の著書には、ウェルズ教授の研究を元にして、フィールディングのウォルポール諷刺の個所について、その実情の詳細な説明が述べられており、筆者も多くの御教示をえたことを感謝しておきたい。

⑧ W. L. Cross, *op. cit.*, Vol. I., Chap. XIV. F. H. Dudden, *op. cit.*, Vol. I, Chap. XVII, (ii).

⑨ W. L. Cross, *op. cit.*, Vol. III, Chap. XXVIII.

⑩ A. D. McKillop, *The Early Masters of English Fiction*, Chap. III, "Henry Fielding."

⑪ James L. Clifford (ed.), *Eighteenth Century English Literature*, George Sherburn, "Fielding's Social Outlook."

⑫ Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art.*

⑬ Aurélien Digeon, *The Novels of Fielding*, Chap. III.